
雨宮 水人の性変化

斑鳩 灯涙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨宮 水人の性変化

【Nコード】

N 8 6 2 0 D

【作者名】

斑鳩 灯涙

【あらすじ】

平凡な全寮制男子高だった学校がいきなり女子高に！そして当たり前のようにそこにいた生徒は水人を含めて全員性変化してしまった！しかも水人意外前の性別の時の記憶がない！「いつになったら男に戻る…」ダルデレと言われた少女になってしまった雨宮水子が、苦悩する性転換ラブコメディ開幕！

00・面倒事は嫌いです

おい、考えても見ろよオレ。

前までどこに通ってた！？そう、夢も何もない青春臭い男子高校だ！

寮の自分の部屋に籠りながら頭を抱えながら一人の少女姿の雨宮^{アツミヤ}水人が扉に寄り掛かっていた。

さつきまで何にも気付かず顔に顔を冷水で洗い、歯を磨き、ゴボゴボと嗽^{うがい}をして少しランニングに行こうと考えていたのだ。しかしなんだ？外に出たら女だらけだ。

寝惚けてるのか？と考え頬を抓る。

「いひゃい……ヘッ？」

痛いとかいてから自分の声にはつとずる。

変に女っぽい。確かになんか自分の声に近いのだが、女だ。完璧だ。

「おいおいおい！ちょっと待ってくれ！」

走って洗面所の扉を開けると、変に小奇麗だった。もっと色々散らかってただろ！？と突っ込みながらお目当ての鏡に走り寄る。

ガツと鏡の端を掴むとソツ…と恐る恐る覗き見る。

誰だこいつと一瞬考えたが間違いないと確信した。元から女っぽい肌色と言われていた真つ白い肌に今の状況に驚いたように瞳を大きくしたオレだ。地毛の茶髪がまた肩とちよつとくらいと結構長い。変にサラサラ言ってたのはこれかと勘付いた。

ペシペシと頬を少し叩く。引っ張る。

「マジッ!？」

ガツと頭を掴むとそう叫ぶ。誰だって一日寝てたら性転換してたら驚くだろう。

それにしても、背もかなり縮んでるなと思いつ。脚は結構長いのだろう。身長は…鏡を掛けていた高さからすると150cmくら

いか。うんと頷く。

それに…パジャマ代わりにしているジャージの胸の部分が少し膨らんでいる。

「…む、胸なの——」

「おはよー！ミツちゃん！」

「キヤアアアアアアアア——ッ！！！！？」

ガシツと胸を背後からいきなり掴まれて悲鳴を上げる。ムニユと聞こえたのは聞き間違いだきつと。

手を振り払うと素早く振り向く。

一瞬、目を疑った。物凄く頭を抱え掛けた。啞然に口を開けてしまふ。

「うふふ、少し育ったんじゃないの？」

同室の奴だ。少しウエーブが掛かっているあの髪に不気味な笑顔。一言で言えば美人なのだが、面倒な性格は変わっていないみたいだ。男の時も嫌に引付いて来たが女だところなるのか。

「お、おい逸途イツジ！何するんだ！」

同じ部屋になってからまだ半年経っていなかったが、結構中の良い友達だった籠目カゴメ。逸途（今女）に怒鳴るように言う。正直心臓止まるかと思ったのだ。それくらい良いだろう。

「逸途？誰それ。わたし逸美イツミだけど」

「ぶっ」

思わず吹いてしまった。おいおい名前の語尾を美に変えるだけで女っぽく見えるんだぜ！？途を美に変えて逸美かこの野郎。死ねオレ。

「ど、どうかしたの？」

何でもないと手を振りながら壁に頭を軽く打つ。

痛いな、軽く。夢か、夢だな。この三階から落ちたらこの夢は覚めるだろうか。こんな夢を見るオレの頭も治るだろうかと本気で考える。

バカ考えろ。一日で騙すように同室の男子生徒を女にすり替え、

オレを女子校に移せば良いだけじゃないか。そして顔も体も整形すれば良いだけじゃないか。…何日寝ればそれは起こるんだよ！違うだろ！平凡返せこの野郎！

「ちょ、頭そんなに打ち付けてどうしたの！？」

「自分を取り戻す！！！」

ガンガンと頭を5回ほど打った時に肩を逸美（自称）に掴まれ壁から引き離された。

「なんか今日可笑しいよ？」

あははと苦笑しながら言う友人に言われた一言に地獄に落とされた。可かしい？そうか可かしいか、オレ。確かに、こんな夢見るなんて終わってるな。死ぬか、夢の中だとしても。目覚めたら精神科行こう。

走り出そうとすると逸美に体を抱き締められる。

「今度は何！？」

「自分を探しにちよつと飛んで来るんだ！！飛ばせてくれ！一回だけで良いから！！頭から行くから！」

「だあゝめッ！！！」

見事に体をいきなり離され無様に床を転がる。ああ、部屋の良い匂いがリアルだ。死にたい。飛ばう。

体を起こそうとすると今度は馬乗りされた。女子の体だからか、逸美の体が重い。

「退け〜〜！」

ジタバタと動くが前に進まない。逆に体力が失われる。

腕に力を込めようとするが如何せんアホみたいに華奢化してしまった体では動けない。

それどころか脇に這う感覚にゾツとする。逸途の時にもやられた悪夢再来。

「コチヨコチヨ〜」

「いにやあああ〜〜！！！！許して無理無理〜〜！！！！」

絶叫が響き渡った。

00・面倒事は嫌いです（後書き）

えゝゝ…新作です。

如何でしょうか？出来ればまだ出したかったですが生憎時間がありませんでした！

水子ちゃんは今から自分の趣味の外見になっていくので心配なくw

次回予告

『水子…ねえ』

当たり前の男子生活がいきなり壊されたら誰だって思うだろう。何でこうなった？と。

『水子さん、おはようございます』

今まで男だった奴が女に。そして逆もあると来た。主にそれは先生達の事だが。

とりあえず散々悩んだ挙句、オレは校舎に向かう事にしたんだ。

次回、雨宮 水人の性変化第一話！『華麗なる学園生活？』に面倒な事は嫌いだこの野郎…。

01・華麗なる学園生活？

「マジなのか…」

えっと自己紹介しよう。オレの名前は雨宮 水人改め雨宮 水子。^{ミナコ}
高校一年生だ。

ついでに今着ている服は完璧にオレのではなかった物だ。しかし用意されていた。便利な世の中もある物だ。

ああ〜もう、スカートスースーする！しかも何で黒ハイソって違う！そんな事じゃないんだ！

頭を抱えながらトイレに寄り掛かる。寮内のトイレだ。女子便所しかありやがらねえ。

それと、この水子っていう名前は制服の胸ポケット部分に書いてある物だ。罫目^{カゴメ} 逸巡改め逸美の反応を見るとこのオレは自分の事をあたしと呼んでいたのようだ。修正的に言葉の一人認証があたしになってしまった。

ポニーテールで縛ってある髪は毛質が良いのか綺麗に垂れている。これは逸美がくすぐりまくった後にやった事だ。趣味ではない。でも触つてると気持ち良い。横髪は肩までと前と代わり映えはない。

どういう事なのだろう。怖くて寮内も歩けない。

「水子…ねえ」

女の声色で言うつと違和感がある。今まで15年間付き合っていた声がいきなり変わるのには怖い物だと実感する。記憶喪失の人はさぞ大変だろう。

男子校がいきなり女子校か。頬杖を突きながら面倒そうに溜め息を吐く。

「大体悩むの苦手なんだよな」

はつきり言って勉強も苦手だったし考えるのが子供の頃から苦手だったのだ。

流石にナルシストではないが、今の自分の顔やスタイルが良かった。

たのは不幸中の幸いだ。結構自分好みだったし、雑誌に載ってても可笑しくないだろう。笑顔だったら。

「鏡に向かって笑顔になれるかバ力野郎…」

呟くと同時に頭を抱える。

これがそのまま他のところにも反映していたら父と母はどうなるか——「考えただけでも恐ろしい…！」鳥肌物だ。正直考えたくない。

男女が逆転するって事か。アニメとかゲームはどうなるんだろうな等と能天気を考える。

そんな時、コンコンと扉がノックされる音。

「ミツちゃあゝん、いる？ダラデレミツちゃあゝん」

なんだ逸美かと安堵を吐く。他の奴だったらまともに話せなかったところだ。

「あ、ああゝ、いるぞ。ついでにダラデレってなんだ」

「ダレてるけど好きな人の前だとデレる人だよ。ツンデレにヤンデレにスネデレって言うのもあるね」

ツンデレは人前だとツンツンしてる奴だな。二人だとデレの。

ヤンデレは…病的に病むほど相手を好きな奴だと…思ったが。

スネデレ…考えるからに拗ねていて二人だとデレるって言う事だろうか。

何でこんな事平然と考えてるんだろう。ちなみにダレてなんてないぞ？

ゆっくりと便器から立ち上がると扉のノブに手をかける。ん？スカートとかショーツをまだ穿いてないんじゃないか？悩むだけだからそんな必要はないぞ。まあ期待した青少年達にはすまない。男心残ってる女を見ても何も面白くないだろ。

回して扉を開けるとにこやかに笑っている逸美がいた。パジャマ姿から着替えたのか制服姿で微笑んでいる。

「どうかしたの？遅刻するよ？」

出来れば置いて行つて欲しかった…と心の中で毒つく。

「自分を見つめ直してた…」

取り敢えず色々誓いも立てた。

一つ、自分の下半身は絶対に見ない。二つ、自分の顔に興味を持たない。三つ、なるべく声を出さない。女声の自分の声が聞きたくないのもある。こ色々と自己嫌悪に陥りそうだからだ。

逸美は少しの間不思議そうに見ていたが、直ぐに思い直したように水人の手を引っ張る。

「早く行かないとね。後5分だし」

行きたくないです…と呟いたが諦めた。こいつには何も通じない。悟ったからだ。

教室は前に自分が知ってた1年B組だ。それはそれで有難い。

だが…全員女だ。なんだか腹を抱えながら床を転げまわりたい気分だ。

「水子さん、おはようございます」

「あ、ああ、おはよう…」

最初に声を掛けて来たのは委員長だ。眼鏡を掛けて優等生バリバリなのは変わらないが、可愛さが段違いだ。長いロングの髪が眩しいぞ委員長。

しかし、男が女に変わったただけで雰囲気も匂いも変わる物だ。

「甘い香りがするな」

考えた事を口に出してたみたいだ。直ぐに聞かれてないか周りを見渡す。どうやら聞いていた奴はいなかったみたいだ。皆何故かガヤガヤと騒がしい。

気になったので逸美に聞いてみた。

「何だか騒がしくないか？」

「そりゃ、ね。この学校に男子が来るみたいだし」

は？と裏返った声を出す。そんなギャルゲーこいた事があるのか。逸美はそんな声が可笑しかったのかくすくす笑っている。

「じ、女子高に男？」

そんな犯罪染みた事が合って良いのかと言おうとしたが、逸美に肩を叩かれた。気付いたら担任が来ていて、その姿に「ぶっ」と吹き出す。

ハゲの大島と呼ばれていた男の担任がおばちゃんになっていた。髪の毛は見事にズラだ。見て分かる。すまん、言うのは無理だが、ずれてるぞ。

逸途の席の隣は自分の席。逸美の隣が自分の席だと理解すると水人はそこに素早く座る。

鞆を横に掛けるとホツと息を吐く。取り敢えず積極的に話し掛けて来る奴はあんまりいないみたいだ。今のところマメな委員長と逸美くらいだろう。

よし、これからはハゲの大島改めズラの大島と命名しよう。

大島は震えている声で「え〜…きいよう、このクラスにい模範生が来る事になりやしたあ」呂律^{ろれつ}回ってねえじゃねえか。遂には口下手大島か。

取り敢えず、模範生というところで少しわかった。

あれだ、模範生って事はここを通常校にしようという事だろう。男を入れて実験をしたいという目論見が丸見えだ。

とにかく、かなり疲れたので机に突っ伏す。眠くなって来たなど暢気に思ってみる。

やっぱあれだ。慣れない格好と状況、声や背丈、スカートに疲れた。胸が揺れるほどないのでそれは困らないが、やっぱりこれはあった方が良くないのか？

だが現女子校のここに来る幸せ者の男は見てみたい。

いや、オレも元男なんだが、そんな事は関係ない。今は胸があるべき物がない。女なのだ。夢だとしてもそんな男には拳を一発入れなければならぬ。

「えっとね、模範生は3人らしいよ？」

まあ、そんなところだろうと逸美に言われた言葉に頷いた。

バカみたいに10人とか入れたら女子校で何を仕出かすかわからない。

「そりえでは…はいっれくらさい」

お前それ業とやってないよなと思いたくなるくらいの噛み方だ。見ていて面白い事に変わりはないが。

「…失礼します」

結構低めの声と同時に物凄く見慣れた顔の男が入って来る。

あつと言ったと同時に言葉を失った。あれは、オレだ。男のオレだ。鏡で見飽きたくらいのオレだ。

そいつは教卓まで歩いて行くと「ええ…」と声を濁す。オレだ。オレの癖だ。

「雨宮 水人だ。…ええ…宜しく」

「『NG場面』」

雨宮 水子トイレ考えでの撮影中

「どうかしたの？遅刻するよ？」

「自分を見つめ直してうひゃあああ！？」
トイレが水で濡れていたらしく横転。

「磨き過ぎだボケエエエ——！！！！」

01・華麗なる学園生活？（後書き）

まあ、あれです。楽しんでいただけましたか？

皆さんの時間の浪費がこの小説に来てくださって嬉しい限りです。
貴方の好みの女の子はどの子でしょうか？

ボクは断然水子ですが！

次回予告

「宜しく…」

元のあたしは席の隣のあたしに言った。

なんでだ！？あたしの神はコント好きなのか！？

…だから…なんで…

体育の時間、またもやあたしの隣にはあいつがいた。

次回、雨宮 水人の性変化第二話！「お姫様抱っこはやめろ」に
性変換…？

02・スパッツは本気か？

「…宜しく」

そう言うのと雨宮 水子（以後水子）の隣の席に着く。

ズラの大島の女……！悩んでいる時にややこしい相手を隣に置くなよ苗字一緒の時点で気付くバカ！だから禿げるんだ！ズラなんだ！怒りと悩みで震えていると、隣のオレが話し掛けて来る。

「大丈夫か、お前」

話し掛けんな殴りそうだと言いたかったが流石にそれはまずい。今は女だし男のオレは結構腕力もあるだろう。わざとバトルファイトなんてしたくない。

気付くと反対側の逸美から丸めた紙が飛んで来ていた。

開くとウサギの柄のプリントがされてあるメモ用紙みたいだ。『大丈夫？保健室行く？』と書かれてある。有難う、男でも女でもお前は親友だ。

逸美を見ると口パクで「だ・い・じょ・う・ぶ」と返す。すると安心したように笑って微笑んでくれた。

バカな元男どもは男のオレにざわついている。お前等元の世界だったらガチホモだぞ。

「お前か、校長にも聞かれたが」

「…何が？」

余り喋らないように頬杖をついたまま顔を水人の反対側に向ける。『苗字が同じで関係があるのかって聞かれたんだ』

お前と関係があるか？ある。元はそれオレの体だ。返せこの野郎。『そう…』

最小限の言葉でその会話を切ると水子は前の黒板を見る。どうやら大島が書き間違えていない限り『雨宮 水人』だ。今のオレの名前じゃないよな。おっと、そろそろあたしって言った方が良さのだから？

口数が少ないのは男のあたしも同じのようだ。

うーん、それにしても疑問だ。他の奴の男バージョンが消えているのにあたしの男はなんているのだろう。いや待て、もしかして他の模範生が罫目 逸迹とか言わないよな？

逸美にその事を聞くとどうやら違ふみたいだ。

「えっとね、その雨宮くんと…確か高倉^{タカクラ} 宮木^{ミヤギ}くんって人かな？もう一人はわかんないや」

大収穫だ。「ありがと」と礼を言つと黒板に向き直る。

流石に罫目 逸迹って名前だったら逸美が放つて置く訳がない。

それにしてもタイミングが良過ぎないか？と水子は思った。あたしの学校が丸ごと性交換したと同時に男の模範生転校。ついでに名前が元のあたしの名前だ。

まずいなあ、頭がこんがらがつて来た。

頭を掻き毟ろうかなとも思った時、逸美が声を掛けて来た。

「大丈夫？ホームルーム終わったし、次の時間体育だし、寝てる？」
「どうやら何時の間にかホームルームが終わつてたみたいだ。あの長話の大島にしては珍しい…というかい加減あたしも酷いな。そろそろ自重しよう。」

「いや、大丈夫」

立ち上がると背伸びをして隣の席を見る。水人が居なくなっている。

「あゝ、雨宮くんの事気になる？」

妙ににやにやしている逸美が聞いてくる。どうやら色々と勘違いしているみたいだ。顔は可愛くなっているのにこういうところは変わらないみたいだ。

「もう、ミっちゃんにはボクがいるのに」

…どうやらこいつの一人呼称は変わっていないみたいだ、羨ましい。

「いや、そんなんじゃないんだ…っと、早く着替えないと」

気付いたようにあたしが言つと逸美もそうだねと言い後ろのロッ

カーに走り寄って行く。

素早く青い袋を二つ両手に持つとすぐに戻って来た。

「はい、体操着」

「あ、ありがとう…」

本当、こいつとはどの世界でも良い関係でやっていけそうだ。

そんな事を考えながら青い袋をパツと開き水子は固まった。おお
く？と口に出し掛ける。

スパッツだ。黒のラインがサイドに入っているスパッツだ。これはかなりきつい。無表情に近い顔になった水子は青い袋を少し観察する。

『雨宮 水子』と書かれている。マジか…と顎を落とし掛けた。

というかこれを書くのか！？とスパッツを凝視する。ウエスト物
凄く細い。それは良い。今の体見る限り入りそうだ。上は普通のジ
ヤージみたいだが、下が如何せんきつ過ぎるだろ。

冬の体育着を着てはいけない決まりでもあるのだろうかと考えて
みるが、ジャージは部屋な上に持って来れる訳がない。それに今は
6月だ。結構暑い。そんなの着たら倒れる事必至だ。

「……腹を括れオレ」

こんな時はオレでいかせてくれあたし。

目を瞑り、スカートの横のジッパーを着た時のように下に一気に
下ろす。

床にそれを落とすと、机の上を探りスパッツを手に掴む。素材的
にこれだ。

「せーの」

両足を入れると素早くスパッツを上上げる。本当に脚がすらり
としていてすんなり入った。これは良い。動きやすい事この上なし
だ。これで走ったらかなり行けるだろう。

上も脱ごうとし、その手をピタと止めた。…ブラジャーをつけて
いたか？

結構制服の生地が厚いので分からないから良い。だが、あれを隠

す為のブラジャーを着けていたか？

バツと焦りながら覗き込むと、ない。当たり前だ。見ないように意識して制服も着たからブラジャーなんて意識してなかったのだから。

なんかないのかと考え青い袋を探ると、セーフだ。スポーツブラと言われる物が入れてあった。だが、それを取り出した時に一枚の紙が挟んであった。ウサギのプリントの紙だ。

『貸し、一だよ』

振り返ると逸美がウインクで返して来た。

入れてくれたのはすぐにわかった。本当にお前は親友だ。三回目だが親友だ。

しかし親友。ブラジャーを着けてない事を知ってるって事はあたしの胸とあれを見た事にならないか？

だから…なんで…こうなる？

あたしの横には半目の男のあたしが立っている。

目の前にはスタートライン。なんと校庭を一周競争という馬鹿げた科目だ。体育だよな、これ。男子と女子を当てさせていいのか。

男のあたしを尻目にちよいちよいとストレッチをする。勝つとか以前に面倒だという感情が来るのは間違いだろうか。そもそも自分に本気で勝っても嬉しくない。せめて。一年分とかそういう商品をつけて欲しいものだ。

だが、元男のあたしの意地を舐めるな。今が女でもあたし自身に負ける訳はない。こういう時に面倒だと思ってあいつが力を抜く事を誰よりも知っている。

ドンドンと二人一組の女子達が走って行き、逸美が走る番になる。

「頑張つて、ミっちゃん」

「あたしよりも自分が頑張れ…」

振り向いて言った逸美に言う。次の番はあたしだが逸美に怪我で

もあつたら困る。

「あはは、任せておいてよ。これでも走りは得意なんだから」

小さくジャンプをしながら言う逸美の脚を見て思った。結構、いやかなり細い。美人に似合っている脚だ。

並べ〜という体育教師の浅岡の声で逸美は前に出る。

横には……委員長だ。応援するまでもないのか？完璧に運動音痴だぞ委員長。

パンという音銃の合図でダツと二人が走り出す。ああ、やっぱり委員長よろよじゃないか。あ、転んだ。逸美が焦ってる。結局ダツシュで駆け寄り委員長を助け起こしたようだ。

「ほら次、並んで並んで！」

美人だった浅岡先生はなんと筋肉質な美青年教師になっていた。

一目見た時はその変化の具合に吐き掛けたが今は少し慣れた。

スタートラインに水子と水人が並ぶ。水子の方は逸美と同じ運動をしており、水人は首を回している。ああ、本当にあたしだ。あの走る前の首回しなんてそっくり。

逸美達が走り終わったようで、浅岡が音銃を空に上げる。

「よいい……」

「『NG場面』」

体育着に着替えてる場面。

「せーの！うわツうがっ！」

勢いつけ過ぎてスパッツが足に引っかかり顔面から前の机に激突。

まだ持ち直せたのだが逸美が笑っていたのでNG。

「笑うなバカー！カメラマン、これ載せたら殴るぞ！」

02・スパッツは本気か？（後書き）

面白かったでしょうか？ボクはネタつまり中です。

あ、知ってます？小説って浮かんた時は良いんですけど進んで来た時にスランプになるんですよ…ハハハ。

ともかく、楽しんで頂けたら幸いです。

どうもありがとうございました！

『次回予告』

なんでそこまで一緒なんだ…。

机の中の筆箱。筆箱の中身全て今のあたしと同じだ。

「ん？」

次回、真似事はどうかと思うに面倒事は嫌いだ…。

03・真似事は嫌いだ…です

スタートダツシユは大事だ。マ。ケル・ジャ。ソンのムーンフォーク並みに大事だ。

……自分から言っておいてなんだが意味がわからない。

音銃が鳴ると同時に地面を蹴る。

「頑張れ〜！ミっちゃ〜ん！」

ゴールをしていなかったのか走り出して直ぐ逸美の応援が聞こえた。委員長を介抱してるらしく、当の本人はちよつと走っただけなのに目を回している。

だが、それを気にしてはいられない。

隣に何時の間にか、男のあたしが並んでいた。これでもかなりのスピードを出していた筈なのに、あっさりと。「ザ。とは違うのだよ、ザ。とは」と言われた気分だ。

「お前に…聞きたい事がある」

明らかに何かを詮索するような言葉の掛け方にむつとする。

「あたしはあんたと話す事ない…！」

全力でそれを抜くとトラックの半分を超えた。まだ半分もあるのかと嘔吐感を感じた。

手と脚を動かしながら体の軽さを実感する。体重が軽いからだろうか動きがスムーズだ。しかしその反映と言って良いほど体力が下がっている。これは辛い。嘔吐感が続く風邪並みだ。

息が絶え絶えになって来るが、後ろにいるバカに追い付かれる訳にはいかない。

「はあ…はあ…！」

何でだ！？何でさつきから男のあたしは一定の距離で着いて来る！？

足音が縮まらないのもあるが広がらない。ストーカーに付き纏われる女の子の怖さが分かる気がする。相手が元の自分なのが悲劇的

なのだが。

今更だが逸美がポニーテールにしてくれていて良かったと思う。
バサつかないのは有難い。

そんな無駄な考えが仇になったのか、ガツと疲れていたのに全力疾走していた靴の爪先に何かが当たる。

「うわっ！」

石だ。あたしと一緒に空中を舞っているこれに躓いたのか。

考えるからに、今グラウンドの地面に顔面からじゃないとはいえ突っ込んでかなり拙い事になるだろう。体に走力付いてたし重力の問題もあるし。

もうあれだ。自爆するんだからいつそ「フタエ。キワミアアアアアア——！」とか叫びながら地面にテポドンのように突っ込んでみるか。受けが取れるかも知れない。体を張っての一世一代のギャグだな。

「ンガッ——！」

途端に何かにぶつかった感覚と共に自分の物ではない悲鳴。

下を見下ろしてみるとあたしの尻の場所と水人の顔面が当たっていた。……なんのラブコメだおい。ギャルゲーなんて目指してないぞ。

しかしそこで速度が落ちたらしくあたしの体はストーンと水人が前に出していた腕に落ちる。

——お姫様抱っこだ。完璧な形の。足の膝が腕の上に乗って逆の腕にはあたしの頭が乗っているというもう綺麗にお姫様だ。

「……危なかったな」

面倒そうに言う水人の顔が嫌に近い。

「う、煩い！助けるなんて言ってない……！」

顔を逸らすと同時に体を捻り腕から抜け出す。器用にタツと地面に足をつけるとゴールに向かって歩き出す。出来る限り近付くなら才——ラを出しつつだ。

ときめいたかだって？それはない。心はちゃんと男のままだ。そ

こまで女化していない。

……… ちょっと待て？ 今のはダラデレって言うやつの一部じゃないのか…？

「ミつちゃん、大丈夫！？」

いきなり前から抱き着かれて悲鳴を上げ掛けた。先程のお姫様抱っこの後だ、許して欲しい。

すりすり頬に頬を擦り付けて来るところから考えて逸美以外浮かばないあたしは間違えているのだろうか。いや、きっと間違っていない。ガンダ・シードの主人公キ・ヤマトの平和主義並みに間違っていない筈だ。

力を込めて逸美を引き離すと「問題ないぞ」と短く言い返した。

何だ？ あたしにはお笑いの神でも憑いてるのかとツツコミたくなつた。

数学の授業。取り敢えず数学担当の通称爺さんというあだ名の国原先生が婆さんになっていたのは良いとしよう。もう吹いたり口を手で抑えたりするのにも疲れた。

「……………」

「……………」

き、気まずい。何で隣の席の水人と一緒に教科書を見てるかと言
うと、

「あゝ雨宮くんはまだ教科書が届いてなかったね。雨宮さんに見せて貰いなさい」

あのババア…と拳を強く握り締めた。流石にこの憎しみはどこにすれば良いのかわからない。何だ、自分の頬を思いつ切り殴れば良いのか？

「はい、次のページ」

ペラッとページを捲ると変にマッチョなリスが自分の筋肉をアピールしている絵と、そこから出ている『ここがポイント』という吹

き出し。本当に事細やかに色々やっている教科書だなと頬杖をしながら思った。

なんか疲れる事が多かったせいかな眠い。男の時と同じ半目状態だ。はっと気付くとシャープペンでなんかルーズリーフにアラビア文字っぽい物を書いていた。左下にあるこれはナスカの地上絵か…？まあそれは良い、消さねば。

見慣れた筆箱を机の中から取り出す。消しゴムを取り出そうとした時、隣の奴の机の上にある物を見て呆然とした。

「な…な…」言葉にならない。そいつが机に出してる物は筆箱だ。普通の。だが、今のあたしにはその筆箱の意味が違う。全く、あたしが持っている物と同じだ。自分の筆箱と見比べるが、傷跡も同じ部分にあり目を疑う。

「ん？」

水人が見る前に水子は筆箱を机の中に入れた。

冷や汗が頬を伝う。同じ筆箱だけだったらまだストーカーとかで済む。警察に突き出せば良い。

しかし、傷跡も同じところにあり筆箱同じでありあまつさえ隣のこいつは元のあたしだ。出来る限り警察に突き出したくない。というか女の自分の真似をするな。

「……どうかしたのか？」

「………関係ない」

これじゃ寡黙な無愛想女だなと考えながら溜め息を吐いた。

まさか自分が筆箱で悩む事になるなんて思わなかったと思いながら机の中で問題の筆箱を開き、消しゴムを取り出す。

ルーズリーフに書かれたナスカ&アラビア語を消していると今度はじっと何かを男のあたしが見ていた。あたしの手元の消しゴムだ。

「…なに？」

彼の筆箱が開かれていたのでそこを目を凝らしながら見ると『A ROBO』とパッケージに書かれていた。手元を見た。『A ROBO』。吹いた。ここまで一緒か！？

だが消しゴムぐらいでこいつが驚く訳がない。もう一度彼の筆箱を見ると今度はルーズリーフの上に置いてあるシャープペンシルに目が行ってしまった。同じだ、青い透明のシャープペンシルが同じだ。

「…いや、なんか似てるなって思ったただけだ」

何かと聞こうとしたが黙っておいた。筆箱の話をされたらこっちの方が荷が重い。どうやら男のあたしは何も知らないようだ。というか…この世界の元の住人って事なのだろうか？ほら、あたしがこくなったって事は鏡に考えれば女だったあたしは男になってる訳だろう。

だからってここまで似てるか。

溜め息を吐くと何かが聞こえて来たので横を見る。

「…寝てるし」

辺りを気にせず静かに寝^{いびき}を立っている。

元の寝顔はこんななのかと思いつながら指で頬を突いてみる。結構柔らかい感触と「うん」と言う間抜けな声が聞いた。

「『NG場面』」

競争が中止し逸美が向かって来た場面。

「ミつちゃん、大丈夫…!？」

「…ん？…キヤアアアア——!!」

スパッツの右腿が破けており太股が見えると言っサービスカットが出たのでNG。

「撮るなバカ!RECって出てるぞ!」

「ミつちゃん可愛いーっ!」

「抱き着くな——!!!!」

03・真似事は嫌いだ…です（後書き）

はいはい四話目更新です！

いやあ、疲れました、ハイペース。

うん？普通のペースだどあほう？わたし的にはモンマータイなのです！

『次回予告』

確かこいつ見た事あったと思うんだが…

「美織だよ」

……あいつは女だった筈だ。

次回、銀髪の童顔に面倒事を起こすなバカ野郎…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8620d/>

雨宮 水人の性変化

2010年10月10日20時35分発行